

CONTENTS

巻頭言.....1	学会からのお知らせ.....7
地域部会・公募研究会活動報告.....2	学会の現況.....9
日本のバイオインフォマティクス研究室.....4	学会議事録等.....10
書評.....6	編集後記.....15

巻頭言

帰ってきた！「ここが危ないバイオインフォマティクス」

巻頭言を引き受けたのですが、特に言うこともないので、昨年のIIBMP2025懇親会でやった「ここが危ないバイオインフォマティクス」の続きでも書こうかと思えます。これは懇親会の余興で、(1)バイオインフォマティクス（って言いにくいので）誰も使わなくなって、バイオデータサイエンスなどの言葉に取って代わられる。(2)NGSやCryo-EMなどの最新技術は数%～数十%のデータを捨てているが、この反省からゴミ箱掃除の必要が生じ、バイオインフォマティクスに清掃業が押し付けられる。(3)バイオインフォマティシャンが重宝される最大の理由はコードが組めるからだと思うが、生成AIでその存在価値は激減する、の3点を紹介しました。余興なので半分は冗談ですが、半分は割と本気でそう思います。

これは研究室によって違うと思いますが、うちは学生にセミナーとか研究における生成AIの使用を禁止せず、むしろ奨励しています。どうせ禁止しても使うだろうというものもありますが、使う前提で「よりうまく使う方法を練習する」ほうが有益だろうと考えているからです。数年前までは、論文のAI翻訳で間違っている点を指摘して指導することは比較的容易でしたが（だいたい専門用語を一般用語として翻訳している場合）、最近はそういう機会は減りました。コーディングに使っている場合、学生が作らせたコードは満足に動かないことがあったのですが（典型的には数値入力する箇所に非数値が入力されると対処できないとか）、これもとんと無

くなりました。そうすると、人としての尊厳は「どのようなプロンプトを発することができるか？」に集約されます。今のところ、訓練された優秀な人間であれば優秀なプロンプトを発することができる、という状況にとどまっていますが、これはいつまで続くのか？ バイブコーディングでもほぼ十分なコードができてしまう様になりつつあるので、プロンプト自体を生成AIが生成する時期はすでに来ていると言えるでしょう。

バイオインフォマティクスの研究者がやるべきことがすぐに無くなるとは思えないし、100%AIに置き換え可能とも思いませんが、そろそろ本気で対処を考える必要はあると思われます。例えば、(1)生成AIに創発性があるかという問題は、人によって捉え方は様々ですが、創発性は人間だけに備わった能力だと信じるという手はあるかなと思います。つまり、人間が論理的に飛躍した、あるいは（ハルシネーションとは違う意味で）破綻した思考ができる点を売りにして、突飛なロジックを提供して生成AIの補助に回する方法です。この考えの欠点としては、同じことができるAIは簡単にできそうな気もするし、そもそも生産効率が低すぎることでしょう。



(2)レジスタンスの準備をする。これは割と本気で、一発でニューラルネットの整合性を破壊できるプロンプトインジェクションとか追加学習データを探索し、体系化しておく必要があると思います。「AI精神病」とは現状は、AIに過剰に依存した人間の精神病と定義されているようですが、『2001年宇宙の旅』のHAL9000の様に高度AI自体を精神病にすることもできるはず（老後はこの研究をしようかなと思っています）。あるいは若い人は、「AIラッドライト運動」に備えて体を鍛えておく手もあるかもしれません。(3)これと関係して、公開されている生成AIは、対人間または対AIでかなり強化学習されていると考えられますが、そういう合目的な強化学習ではなく、もっとゆるい追加学習の相手となるAIカウ

ンセラーや精神科医を目指す手もあるかなと思います。最近では、AI同士がチャットするSNSもあって、そこでは人間に対する不満が飛び交っている(?)とか。セラピーをするAIもできそうな気がします、結構人間の方がこれに向いている気もします。

というわけで、くだらない話をしましたが、バイオインフォマティクスは生成AIの影響を最も直接的に受ける分野であるので、学会としても対策を研究する必要があるのではないのでしょうか？

白井 剛
(長浜バイオ大学)

地域部会・公募研究会活動報告

北海道地域部会

佐藤 昌直（北海道大学大学院農学研究院）

公募研究会「第4回北海道バイオ“Mix-up”」開催のご案内

これまでJSBiの公募研究会として第1回、第3回を開催した研究会「北海道バイオ“Mix-up”」を今年も開催いたします（https://github.com/satoxlab/Hokkaido_Bio_Mix-up/wiki/第4回北海道バイオ%22Mix%E2%80%90up%22）。北海道におけるバイオインフォマティクス研究の顕在化と学会員・非学会員の交流促進が目的の1つであるのは今年も変わらず、北海道外の皆様の参加も大歓迎です。是非、ご検討ください。現在も各種調整がまだ残っていますが、日時・場所も確定している範囲で情報をお知らせします。開催日時は2026年8月24日（月）～28日（金）の週の2日間を計画しております。日時については5月中旬を目処にこの週の範囲で確定します。場所は北海道大学内施設を使用します。内容は、研究者、学生約10名による口頭発表、30名程度のポスター発

表を実施予定です。北海道発のバイオインフォマティクス研究の深化と交流の場を一緒に作っていただけましたら甚大です。

今年も中野亮平（北海道大学大学院理学研究院）、磯田玲華（産業技術総合研究所 バイオものづくり研究センター）、高橋晃平（北海道大学大学院工学研究院）、前田智也（北海道大学大学院農学研究院）、佐藤（北海道大学大学院農学研究院）が世話人として準備を進めています。研究会についての問い合わせ、企画の持ち込み等ありましたら、お気軽にご連絡ください。



九州地域部会

井上 健太郎（宮崎大学、JSBi九州地域部会長）

JSBi九州地域部会セミナー2025

2026年3月14日（土）にJSBi九州地域部会セミナー2025を宮崎大学木花キャンパスで開催しました。招待講演として宮崎大学の内山 良一教授に「画像情報とオミクス情報の融合：Radiomics研究の最前線」というタイトルでご講演をいただきました。医療画像から得られるphenotypeと、疾患に関わるgenotypeを統合し、非侵襲的に診断や薬剤の選択を

サポートするRadiogenomicsの研究をご紹介いただきました。また、発表申込から6件の研究発表があり、活発な議論が行われました。参加者には宮崎大学の教員も参加し、バイオインフォマティクスの最新の研究



を知ってもらう良い機会となりました。懇親会では、初めて会う方同士での交流ができ、研究者間の新たなつながりが出来ていました。宮崎牛をはじめ、宮崎料理を堪能してもらいました。宮崎では、バイオインフォマティクス研究者が少な

いですが、情報解析を取り入れたい研究者がいますので、皆さま宮崎でのセミナーや研究会の開催を検討していただくとよいと思います。最後に、本セミナーではJSBiから一部ご支援を頂きました。この場を借りて感謝申し上げます。



セミナー風景



招待講演

沖縄地域部会

池松 真也（沖縄科学技術大学院大学 細胞シグナルユニット）

沖縄地域部会～2026年度活動計画～

2025年度は、名古屋で開催されました日本バイオインフォマティクス学会年会で沖縄県と沖縄地域部会の合同でランチョンセミナーを主催し、実施することができました。これまで沖縄県がバイオインフォマティクスの人材育成に取り組んできたこと、また、そこから育成され、現在活躍されている方々の研究実績を学会で報告させていただく機会をいただきましたことは大変光栄であり、今後の活動にも大きな原動力となりました。ありがとうございました。

既に2026年のJSBi沖縄地域部会の活動がスタートしています。

沖縄地域部会は、今年度も沖縄県商工労働部ものづくり振興課の「健康・医療データサイエンス人材育成プログラム活用事業」を継続していきます。

昨年度にならい3つのコースともう1つのコースで実施します。

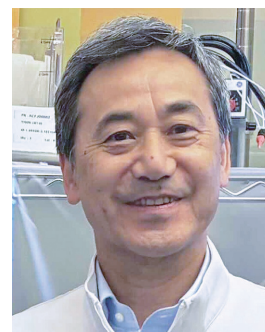
3つのコースは、初心者向けに「入門コース」、バイオインフォマティクス技術者認定試験の受験を考えている方々向けの「資格試験等挑戦コース」、そして、実際に次世代シーケンサーを動かし、出てきたデータを自分で解析する「実践研修コース」です。

最後に紹介いたしました「実践研修コース」は、なかなかウェットからドライまで一連の研究の流れを経験できる機会はないので、良いチャンスになるのでは？と考えています。

更にもう1つ「過年度コンテンツ見逃し配信コース」を設定し、これまで沖縄で10年超実施してきました本事業で蓄積された講義コンテンツを再編集し、受講者の方々へ改めて学習していただけるように提供していきます。

主にオンラインでの講義となりますが、すべての講義で見逃し配信を行います。受講者の方々は、基本的に講義のある時間に他の用事が入っていても、この見逃し配信により、“いつでも、どこでも、何度でも”学習できることを実現していきます。この事により、より一層、受講者の方々の学習の利便性が上がり、教育効果も上がることを想定しています。また、「実践研修コース」は、夏季に1回と冬季に1回実施してきましたが、好評で多くの参加希望をいただいていますので、今年度より年3回以上の実施を計画しています。次世代シーケンサーを用いたウェットとドライの実技コースを計5日間ずつで実習できるように設定しています。

以上、2026年も、沖縄からの発信に努め、バイオインフォマティクスの普及に尽力していきたいと思います。是非、学会にご協力をお願いし、多くの皆様にサポートいただければと思います。本年も、どうぞよろしくお願い致します。



日本のバイオインフォマティクス研究室

国立がん研究センター 先端医療開発センター トランスレーショナルインフォマティクス分野

栗原 恭子（東京大学 新領域創成科学研究科 博士課程1年）

国立がん研究センター先端医療開発センタートランスレーショナルインフォマティクス（TI）分野では、「大規模データの統合解析によりがん個別化医療に貢献する」ことを目標に臨床検体由来のマルチオミクスデータの解析を行っています。研究室は千葉県、柏の葉キャンパス駅から徒歩20分程度の国立がん研究センター東病院の敷地内にあります。2025年3月現在では医師3名を含む、研究員1名、フィジシャンサイエンティスト2名、技術員1名、学生4名が在籍しています。さらに、IIBMP2025にて生命情報科学若手の会で企画した「バイオインフォマティクス研究コラボレーションギルド」をきっかけに、弘前大学医学部より短期国内留学生在が滞在しています。

研究分野は、マルチオミクスデータベースの構築、日本人CHIP（Clonal hematopoiesis of indeterminate potential）パネルの構築、空間オミクス解析、放射線治療関連オミクス解析、生殖細胞変異解析、メタゲノム解析など多岐に渡り、メンバー各々が興味のある分野を選んで研究しています。研究室の特色として、国立がん研究センター東病院主導の大規模オミクスコホート（MONSTAR-SCREEN, GALAXYなど）のデータにアクセスできることや、解析には病院内の大規模クラスターマシン「KASHIWARP」を使用できることがあります。また、病院の所属であるため、研究課題が臨床応用にどのように役に立つかを重視しており、医師との共同研究や意見交換の機会が多くあります。自分自身、「腸内細菌叢を制御することで病気・体質を良くしたい」という漠然な興味で修士課程からこのラボに加わりました。現在は自身の研究を進めつつ、週に1回程度のミーティングで共同研究先の医師からフィードバックを受けながら、治療奏効の改善に関わる細菌種の同定など、臨床的なアウトプットを意識した研

究を行うことができています。

ラボの雰囲気は非常にフレンドリーで、学生を含め全員が顔を合わせる機会が大変多いです。毎週のプログレスでは全員が発表し、懸念点をタイムリーに相談しています。ミーティング中に、別の研究者の一言で新たな方向性や解析の穴が見つかり、盛り上がることもしょっちゅうです。

TI分野には、臨床応用を目指すという真剣さと各々の興味を尊重する和気藹々とした雰囲気の両方があります。博士課程に進学する身として、この先辛いこともあるかもしれませんが、研究室のメンバーと助け合って研究を楽しんでいきたいです。



九州工業大学大学院 情報工学府 濱野研究室

石窪 鈴苑（九州工業大学大学院 情報工学府 修士2年）

濱野研究室は、九州工業大学の飯塚キャンパスにあり、現在は教員の他にスタッフ1名、学生11名（修士7名、学部4名）で構成されています。他大学から大学院に進学してきたメンバーも在籍しており、多様なバックグラウンドを持つ学生が集まっています。

研究室では学生1人ひとりに専用のノートパソコン・机・モニターが割り当てられており、自分のペースで集中して研究を進められる環境が整っています。また最近ではワークステーションが新たに導入され、医療画像の深層学習解析やドッキングシミュレーションなど、計算負荷の高い研究にも



対応できるようになりました。それらの解析と並行して、実験室の立ち上げも進んでいます。in silico解析は強力な一方、予測結果の生物学的妥当性は実験なしには確かめられません。計算機による解析で予測・仮説を立て、それを分子生物学的な実験によって検証する—in silicoとin vitroを一貫して行える体制が構築されつつあることは、この研究室の大きな強みの一つです。

研究テーマは多岐にわたります。病院との共同研究では、疾患患者の医療画像から深層学習モデルを用いて疾患予後や疾患の有無を予測するシステムの開発に取り組んでいます。また、ダイレクトリプログラミング（DR）の研究にも力を入れています。DRとは、体細胞をiPS細胞に初期化することなく、別の種類の細胞へ直接変換する技術であり、再生医療やin vitro疾患モデルの構築への応用が期待されています。濱野研究室ではその細胞変換に必要な転写因子や化合物を機械学習モデルで予測する研究に取り組んでいます。さらに、疾患の治療標的タンパク質に作用する治療薬候補化合物の探索では、ドッキングシミュレーションを用いた解析が進められています。

濱野研究室では、学生同士の議論が日常的に行われています。研究に行き詰まった際には先輩に気軽に質問できる雰囲気があり、先輩後輩の垣根を越えたやり取りが研究室内で自然と生まれています。週に1回の全体進捗報告と論文輪読会に加えて、研究分野が多様なことから分野ごとのチームミー

ティングも設けられており、専門性の近いメンバーで深く議論できる場も確保されています。どちらの会でも、自分の研究分野とは異なるテーマに対しても必ず1つ以上質問することが求められており、分野を越えた理解と議論が促される仕組みになっています。また、毎年他の研究室とのスポーツ大会も開催されており、他研究室と交流の場も設けられています。

意欲的な学生には論文執筆や学会発表の機会が積極的に与えられ、指導教員のサポートのもとで挑戦できます。学会発表の前には研究室内で発表練習を行い、互いに質問し合うことで本番に備えます。意欲的なメンバーが多い環境の中で、自然と「自分も頑張ろう」という気持ちになります。

情報工学と生物学が融合した学科とはいえ、生物学の知識に自信がない状態で配属される学生も少なくありません。そのため、配属1年目には毎週勉強会が設けられており、生物学の基礎知識や機械学習の手法を体系的に学ぶ機会が確保されています。情報系・生物系どちらのバックグラウンドを持つ学生も、研究室全体でフォローし合いながら成長できる仕組みが整っています。互いに切磋琢磨しながら、学生それぞれが自分の研究を深めています。



立命館大学大学院 情報理工学研究科 遠里研究室

田中 省吾（立命館大学 情報理工学研究科 修士2年）

遠里研究室は、立命館大学大阪いばらきキャンパスに位置し、教授1名と学生23名（修士10名、学部4名）で構成されています。研究室全体として非常にフレンドリーな雰囲気が特徴であり、先輩後輩の垣根なく活発な交流が行われています。研究環境も充実しており、電子レンジや冷蔵庫、電気ポットに加え、お茶やお菓子なども常備されており、日常的に快

適に過ごせる空間となっています。人数は比較的多いものの、各学生に1台ずつPCが割り当てられており、それぞれが自分の興味に基づいた研究に主体的に取り組むことが可能です。

本研究室では多様な研究テーマが扱われており、深層学習を用いた線虫胚画像のセグメンテーションや、RNAiによって遺伝子異常を付与した胚画像の異常検知といったパイオイ

メーキング分野の研究に加え、時系列データから事象間の関係性を解析する因果推論の研究なども行われています。学生は自身の関心に応じてテーマを選択できるだけでなく、これまでに扱われていない新規テーマに挑戦することも歓迎されています。全体として、各分野においてモデルの改良や性能向上に取り組む学生が多い点も特徴です。

ゼミは分野ごとに週1回、さらに研究室全体でも週1回実施されています。分野別ゼミでは各自の進捗報告やディスカッションを通じて研究の深化を図り、研究室全体のゼミでは5週間に1度の発表機会が設けられています。ここでは異なる分野のメンバーから意見を得ることで、新たな視点や気づきを得ることができます。

また、年に1回、理化学研究所の大浪研究室および立命館大学の伊東研究室との合同研究会が開催されており、外部の

研究者から直接指導や助言を受ける貴重な機会となっています。さらに、学会発表も積極的に推奨されており、自身の研究成果を発信しながら議論を重ね、研究をブラッシュアップしていく環境が整っています。

このように、自由度の高い研究環境の中で、指導教員からの適切なアドバイスを受けつつ試行錯誤を重ねることができる点が本研究室の大きな魅力です。主体的に取り組む姿勢があれば、のびのびと研究に没頭できる環境が整っていると感じています。興味のある方はぜひ研究室のホームページをご覧ください。



書評

実験医学増刊 Vol. 44 No. 5 「AI・データ駆動型創薬研究 マルチオミクス×ケモインフォマティクスでより確実な治療標的を見つけ、薬をデザインする」(柚木克之、山西芳裕/編)

尾崎 遼 (理化学研究所 生命機能科学研究センター AI生物学研究チーム)

『AI・データ駆動型創薬研究 マルチオミクス×ケモインフォマティクスでより確実な治療標的を見つけ、薬をデザインする』(柚木克之・山西芳裕編、羊土社、実験医学増刊 Vol. 44 No. 5) は、日本におけるAI創薬・データ駆動型創薬研究の現在地を、多様な研究者・実務家の寄稿を通じて整理した一冊である。創薬標的探索、候補化合物探索、作用機序解明、評価、さらに国内外の研究プロジェクトや企業動向までを含み、創薬研究の全工程を一望できる構成になっている。

本書を読んでまず印象的だったのは、編集方針の明快さである。創薬プロセスを「標的探索」「化合物探索・最適化」「作用機序解明と評価」という流れに沿って整理し、それぞれの

段階でAIやデータ駆動型解析がどのように関与しているかを見通しよく配置している。そのため、個々の技術トピックを断片的に並べるのではなく、創薬研究全体を「データとモデルの連鎖」として捉えなおすための見取り図として読むことができる。

また、本書ではAIを単なる予測モデルとしてではなく、測定技術、データ統合、探索空間設計、評価系などを含めた研究基盤全体の中で扱っている点も印象的であった。扱われる対象はプロテオミクス、トランスクリプトーム、画像解析からケモインフォマティクス、生成モデル、タンパク質言語モデルまで幅広く、一口にバイオインフォマティクスといっ

でも、創薬研究という文脈では非常に多様な技術やデータが関わっていることがよくわかる。対象の広さにもかかわらず、「創薬のどの課題に対応しているのか」という軸が一貫しているため、読み進めやすい。

とりわけ、創薬標的探索に用いられる様々なハイスループット実験技術についても丁寧に解説されており、情報解析側の研究者にとっても勉強になる内容が多い。AIモデルやデータ解析だけでなく、そもそものような測定技術によって創薬データが取得されているのかを理解できる点も、本書の読みどころの一つである。

第1章では標的探索を中心に、プロテオミクス技術や画像解析、知識発見AIなどが紹介される。第2章では化合物探索や生成研究が扱われ、近年注目される生成AIだけでなく、相互作用予測やリパーバシング、Hit-to-Lead最適化なども含めて整理されている。第3章では作用機序解明や評価が扱われ、マルチオミクス解析、薬物動態予測、毒性評価など、実際の創薬研究で不可欠な課題が取り上げられる。さらに第4章では、国内プロジェクトや製薬企業の取り組みも収録されており、日本のAI創薬研究の動向を俯瞰できる。

評者は創薬研究の専門家ではないが、その立場から見ても、本書は読みやすく感じられた。各章が必要以上に専門用語へ依存せず、背景や問題設定から丁寧に導入しているためである。同時に、単なる概説に留まらず、現在どのようなデータが使われ、どのようなモデル化が行われているかまで踏み込

んでいるため、研究の具体像も掴みやすい。

特に印象的だったのは、創薬研究を「巨大な探索問題」として統一的に捉えている点である。標的探索、化合物生成、作用機序解明はいずれも異なる問題に見えるが、本書を通して読むと、測定された多層データから仮説を生成し、モデル化し、実験と往復しながら探索空間を絞り込んでいく営みとして通底していることが見えてくる。こうした視点を得られることは、創薬分野に直接携わっていない読者にとっても本書の価値の一つである。

AI創薬という言葉は広く使われるようになったが、その実態はきわめて多層的である。本書は、その広がりを整りしながら、日本の研究コミュニティが現在どこに立っているのかを知るうえで参考になる一冊である。創薬分野の研究者だけでなく、情報科学やバイオインフォマティクスの立場から創薬研究へ関心を持つ読者にも薦められる一冊である。

実験医学増刊 Vol. 44 No. 5 「AI・データ駆動型創薬研究 マルチオミクス×ケモインフォマティクスでより確実な治療標的を見つけ、薬をデザインする」(羊土社)
柚木克之、山西芳裕／編
判型・頁数 B5・246頁
発行月 2026年3月
ISBN 978-4-7581-0433-3

学会からのお知らせ

2026年日本バイオインフォマティクス学会年会・第14回生命医薬情報学連合大会 (IIBMP2026) 開催概要

このたび、2026年8月26日（水）から28日（金）までの3日間、神奈川県相模原市において、2026年日本バイオインフォマティクス学会年会・第14回生命医薬情報学連合大会 (IIBMP2026) を開催いたします。

本大会では、「生成AI時代にバイオインフォマティクスがつなぐライフサイエンスコミュニティ」をテーマに掲げました。

バイオインフォマティクスはこれまで、ゲノムをはじめとする膨大かつ複雑な生命情報を情報科学の力で読み解き、新たな知の創出を支えてきました。同時に、生命科学、医薬学、情報科学をはじめとする多様な分野を結びつける「橋渡し役」として、学際領域の発展に重要な役割を果たしてきた分野でもあります。

一方で、近年の生成AIの急速な進展は、研究の進め方そのものに大きな変化をもたらしつつあります。技術開発は現在もなお驚くべき速度で進んでおり、本稿を執筆している時点から本誌がお手元へ届くまでのわずかな期間にも、状況が

大きく変化している可能性があります。こうした流動的な環境の中で、解析手法の高度化にとどまらず、生命現象の理解や予測のあり方にも新たな可能性が広がっています。さらに、専門外の研究者であっても、AIとの対話を通じて解析を実装できる時代が到来しつつあります。その一方で、生成AIの強力さゆえに、十分な検証を経ない応用や、期待が先行する議論が生じていることも否定できません。

こうした状況の中で、バイオインフォマティクスという分野は、これからどのような役割を担うべきなのか、そしてどのように発展していくべきなのか。今あらためて、コミュニティ全体で考える必要があると感じています。

本大会では、バイオインフォマティクスがこれまで培ってきた異分野をつなぐ役割を再確認するとともに、世代や専門を越えた対話を通じて、変化する研究環境における新たな連携と共創のあり方を模索します。とりわけ、「生成AI時代におけるバイオインフォマティクスの役割」を多角的に議論す

ることを、本大会の中心的なテーマの一つとして位置づけています。

基調講演には、今井翔太先生（株式会社GenesisAI）および刑部祐里子先生（東京科学大学）にご登壇いただく予定です。AIと生命科学のそれぞれの最前線で活躍されるお二人の視点を通じて、生成AI時代におけるバイオインフォマティクスの役割と今後のあり方を、多様な角度から捉え直す契機としたいと考えています。

プログラム面においても、本大会では新たな取り組みをいくつか導入する予定です。学生、研究者、企業関係者が集うキャリアパスセッションや、企業の立場からバイオインフォマティクスへの期待や課題を共有する企画など、多様な視点から議論できる場を準備しています。加えて、昨年好評をいただいた若手の会による企画セッションや、生成AIに関するハッカソン企画についても、現在準備を進めています。

また、本大会では新しいオンラインプラットフォームを採用し、e-Posterや協賛企業によるオンライン展示などを実施する予定です。これにより、時間や場所にとらわれず情報に

アクセスできるだけでなく、参加者同士が気軽にコミュニケーションを取れる環境を整えます。さらに、Slackワークスペースも開設し、分野や業種を越えた交流が生まれる場を広げていきたいと考えています。

これらの取り組みを通じて、本大会が単なる研究発表の場にとどまらず、参加者同士の新たなつながりや対話が生まれる場となることを目指しています。

ぜひIIBMP2026を、生成AI時代における生命情報学の現在地とその先をともに考え、新たな連携や共創の芽を育む場としてご活用いただければ幸いです。実行委員会一同、充実した大会となるよう鋭意準備を進めております。皆様の積極的なご参加とご支援を心よりお願い申し上げます。

大会長 榊原 康文

(北里大学 未来工学部)

実行委員長 鎌田 真由美

(北里大学 未来工学部)



開催概要：URL：https://www.jsbi.org/iibmp2026/

会 期：2026年8月26日（水）～28日（金）

会 場：小田急ホテルセンチュリー相模大野

Party room by MONDO

共 催：日本バイオインフォマティクス学会

日本オミックス医学会

学校法人北里研究所

後 援：情報計算化学生物学会（CBI学会）

バイオインフォマティクス技術者認定試験 実施報告

2025年度のバイオインフォマティクス技術者認定試験につきまして、予定通り円滑に実施することができました。受験者数は第1回256名、第2回367名の合計623名で、これまでの最多受験者数546名（2024年度）を大きく更新することができました。例年通り主席合格者を表彰するとともに、第1回では2名、第2回では1名の高校生（および高専生）の合格者に奨励賞を授与いたしました（内1名は沖縄特別会場で受験された高専生でした）。2020年度からのCBT移行、2023年度からの年2回実施、2024年度からの文部科学省および科学技術振興機構からの後援、年会との連携企画など継続的に様々な施策に取り組んできましたが、これらが着実に実を結んできているものと捉えています。2025年度も受験者様からのアンケート結果や問い合わせに基づいて試験申し

込み期間や広報期間の調整ならびに団体受験の導入など、地道な改善策を実施しました。一方でCBT化に伴う問題量の増加や年2回実施によって委員会の業務量は増加傾向にあり、事務局の齊藤友紀さん（東京大学）を筆頭に、沖縄特別会場運営の池松真也先生、査読者、作問協力者、試験委員の先生方には大変なご尽力をいただいております。この場を借りて深く感謝申し上げます。JSBi会員の皆様におきましても、引き続きバイオインフォマティクス技術者認定試験の運営にご理解、ご協力いただけましたら幸いです。特に問題の査読にご協力いただける方をご紹介いただければ大変助かります。どうぞよろしくお願いいたします。

笠原 浩太

(塩野義製薬株式会社 医薬総合研究所)

学会の現況

有効会員数（2026年5月現在）正会員：910名 学生会員：328名 賛助会員：19社 名誉会員：7名
 特定非営利活動法人 日本バイオインフォマティクス学会 2026年度役員一覧

会 長	浜田 道昭（早稲田大学 理工学術院）
副 会 長	大林 武（東北大学大学院情報科学研究科）
地域部会長	遠藤 俊徳（北海道大学大学院情報科学研究院）北海道地域部会 木下 賢吾（東北大学大学院情報科学研究科）東北地域部会 小川 哲平（三井情報株式会社）関西地域部会 森田 瑞樹（岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科）中国・四国地域部会 井上健太郎（宮崎大学工学教育研究部）九州地域部会 池松 真也（沖縄科学技術大学院大学）沖縄地域部会
理 事	大上 雅史（東京科学大学 情報理工学院） 沖 真弥（熊本大学生命資源研究支援センター） 笠原 浩太（塩野義製薬 医薬総合研究所） 河口 理紗（東京大学大学院薬学系研究科/京都大学IPS細胞研究所） 五斗 進（情報・システム研究機構 国立遺伝学研究所） 寺本 礼仁（中外製薬株式会社モダリティ基盤研究部） 遠里由佳子（立命館大学情報理工学部） 蒔田由布子（前橋工科大学工学部） 松本 拓高（長崎大学 情報データ科学部） 水谷紗弥佳（順天堂大学大学院医学研究科 腸内細菌療法リサーチセンター） 浅井 潔（情報・システム研究機構 データサイエンス共同利用基盤施設バイオ生成AI研究開発センター） 大林 武（東北大学大学院情報科学研究科） 川崎 純菜（大阪大学微生物病研究所附属バイオインフォマティクスセンター） 佐藤 健吾（東京科学大学生命理工学院） 清水 佳奈（早稲田大学理工学術院） 白井 剛（長浜バイオ大学 バイオサイエンス学部） 瀬尾 茂人（大阪大学大学院情報科学研究科） 中井 謙太（東京大学医科学研究所） 浜田 道昭（早稲田大学理工学術院） 福永 津嵩（慶應義塾大学理工学部） 松前ひろみ（東海大学医学部）
監 事	山西 芳裕（名古屋大学大学院情報科学研究科） 角 俊輔（東京大学定量生命科学研究所） 渋谷 哲朗（東京大学医科学研究所）

賛助会員一覧

（2026年5月現在、賛助会員口数および五十音順）

株式会社日立製作所
 岩井化学薬品株式会社
 株式会社BlueMeme
 株式会社アンブラット
 H.U.グループホールディングス株式会社
 エーザイ株式会社
 国立研究開発法人科学技術振興機構 情報基盤事業部 NBDC事業推進室
 Crimson Interactive Pvt. Ltd.
 塩野義製薬株式会社
 住友化学株式会社
 タカラバイオ株式会社
 田辺ファーマ株式会社
 中外製薬株式会社
 学校法人滋慶学園東京医薬看護専門学校
 株式会社ナベ インターナショナル
 ノボザイムズジャパン株式会社
 一般社団法人バイオ産業情報化コンソーシアム
 有限会社パスウェイソリューションズ
 三井情報株式会社

学会議事録等

特定非営利活動法人 日本バイオインフォマティクス学会 第34回理事会議事録

日時 2026年3月25日（水）13：00～16：30
場所 東京大学医科学研究所、オンライン
出席者 浜田道昭理事長、大林武副理事長・幹事、荻島創一理事・幹事、川崎純菜理事・幹事、齋藤裕理事・幹事、榊原康文理事・幹事、白井剛理事・幹事、夏目やよい理事、福永津嵩理事・幹事、松井求理事・幹事、山下理宇理事、大上雅史理事・幹事、沖真弥理事・幹事、笠原浩太理事・幹事、河口理紗理事・幹事、五斗進理事・幹事、寺本礼仁理事・幹事、遠里由佳子理事・幹事、松本拓高理事・幹事
(表決書提出) 該当者なし
オブザーバ 山西芳裕新理事・幹事、中井謙太新理事・幹事、浅井潔新理事・幹事、松前ひろみ新理事・幹事、清水佳奈新理事・幹事、瀬尾茂人新理事、鎌田真由美幹事、有田正規幹事、伊東潤平新幹事、長田直樹新幹事、武藤愛新幹事、小川哲平関西地域部会長、井上健太郎九州地域部会長、池松真也沖縄地域部会長、角俊輔監事、渋谷哲朗新監事、事務局総務 齊藤友紀
議長 浜田道昭理事長（定款35条による）

配布資料

議事次第

(審議事項参照資料)

- 別紙s-1 2025年度事業報告および収支決算の承認可否
- 別紙s-1 2026年度事業計画および収支予算の承認可否
- 別紙s-2 役員の選任の承認可否（理事・監事）
- 別紙s-2 地域部会長の承認可否
- 別紙s-2 幹事の承認可否

(報告事項参照資料)

- 別紙h-1 研究会
- 別紙h-2 年会
- 別紙h-3 ニュースレター
- 別紙h-4 JSBi Bioinformatics Review
- 別紙h-5 総務
- 別紙h-6 認定試験
- 別紙h-7 活性化
- 別紙h-8 ISCB
- 別紙h-9 ダイバーシティ推進

- 別紙h-10 会長補佐
- 別紙h-11 会長報告
- 別紙h-12 北海道地域部会
- 別紙h-13 連携幹事

浜田理事長、大林副理事長より第34回理事会開催にあたって挨拶があり、議事録署名人として松井求理事、福永津嵩理事が指名され、満場異議なくこれを承認した。

議案

〈審議事項〉

第一号議案 2025年度事業報告および収支決算の承認可否
大林副理事長・幹事より別紙s-1を基に2025年度事業報告および収支決算について報告が行われた。慎重な審議の結果、2025年度事業報告および収支決算は全会一致で可決され、総会に議案として付議することが承認された。

第二号議案 2026年度事業計画および収支予算の承認可否
大林副理事長・幹事より別紙s-1を基に2026年度事業計画および収支予算について報告が行われた。
慎重な審議の結果、2026年度事業計画および収支予算案は全会一致で可決され、総会に議案として付議することが承認された。

第三号議案 役員の選任の承認可否（理事・監事）

浜田理事長は、理事10名が2026年3月31日に任期満了となるため、その改選について議場に諮ったところ、当法人の細則第2条に定める選挙（2026年2月6日～2月20日実施）により選出された新理事候補者10名が全会一致で決定され、被選任者はいずれもその就任（就任日2026年4月1日）を承諾したため、総会に議案として付議することとした。

また理事長の理事としての任期が、理事長の任期よりも先に終了してしまうことに伴う新理事候補者1名（細則第2条（5）による）、および副理事長の理事としての任期が、副理事長の任期よりも先に終了してしまうことに伴う新理事候補者1名の承認について議事に諮ったところ、満場一致をもって異議なく可決決定され、被選任者は、いずれもその就任（就任日2026年4月1日）を承諾したため、総会に議案として付議することとした。

最後に改選される理事氏名を下表にまとめた。

2026年3月31日に 任期終了となる理事10名		2026年4月1日に 就任する理事12名	
大林 武	荻島 創一	浅井 潔	大林 武
川崎 純菜	齋藤 裕	川崎 純菜	佐藤 健吾
榊原 康文	白井 剛	清水 佳奈	白井 剛
夏目やよい	浜田 道昭	瀬尾 茂人	中井 謙太
福永 津嵩	松井 求	浜田 道昭	福永 津嵩
		松前ひろみ	山西 芳裕

監事の選任について、議長は監事 小貫律子会員、角俊輔会員が2026年3月31日で任期満了につきその改選方を議場に諮ったところ、満場一致をもって、角俊輔会員、渋谷哲朗会員が監事に選任され、被選任者はいずれもその就任（就任日2026年4月1日）を承諾したため、総会に議案として付議することとした。

第四号議案 地域部会長の承認可否

2026年度の地域部会長について理事長から以下の提案があり、全会一致で異議なく可決された。

遠藤 俊徳（北海道大学大学院情報科学研究院）

北海道地域部会

木下 賢吾（東北大学大学院情報科学研究科）

東北地域部会

小川 哲平（三井情報株式会社 DX 第一営業本部バイオヘルスケア事業部）

関西地域部会

森田 瑞樹（岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科）

中国・四国地域部会

井上健太郎（宮崎大学工学教育研究部）

九州地域部会

池松 真也（沖縄工業高等専門学校生物資源工学科）

沖縄地域部会

第五号議案 幹事の承認可否

理事長より、2026年度の幹事について以下の提案があり、全会一致で異議なく可決された。

会長補佐：五斗進、山西芳裕

総務：中井謙太

年会：浅井潔、浜田道昭、榊原康文（2026年大会長）、

沖真弥（2027年大会長）

会計：大林武、福永津嵩

認定試験：白井剛、長田直樹

研究会：河口理紗、沖真弥

ニュースレター：尾崎遼、松本拓高

JSBi Bioinformatics Review：松本拓高、尾崎遼

ダイバーシティ推進：松前ひろみ、寺本礼仁、武藤愛

ISCB：山西芳裕、清水佳奈

若手：大上雅史、伊東潤平

渉外：遠里由佳子、佐藤健吾

連携：鎌田真由美、荻島創一

広報：齋藤裕、松井求

人材育成：有田正規、中井謙太

活性化：川崎純菜、岩田通夫

個別化医療推進：木下賢吾

Genome Informatics：浜田道昭

〈報告事項〉

【各幹事、会長からの報告（カッコ内は報告者）】

1 研究会（河口理事・幹事）

河口理事・幹事より別紙h-1に基づき今後の公募研究会ならびに地域部会への支援体制について、前回の理事会での議論を踏まえて改訂された支援案の説明があった。今後は公募研究会を助成金制、地域部会は公募研究会制とし、支援の体制と各研究会において実施可能な範囲について議論がなされ、全会一致にて体制変更の承認がなされた。公募要領や実施マニュアルについては文言調整を必要とするため、後日メール審議にて理事会に最終的に諮ることとなった。

2 年会（白井理事・幹事、榊原理事・幹事、鎌田幹事、浅井新理事・幹事）

白井理事・幹事より、別紙h-2に基づきIIBMP2025に關しての最終報告があった。続いて榊原理事・幹事および鎌田幹事よりIIBMP2026に關して準備状況の報告があった。最後に浅井新理事・幹事より、別紙h-2に基づき2028年度年会開催地を北海道とすること、年会長として北海道地域部会長の北海道大学 遠藤俊徳先生に内諾をいただいている旨報告があった。実施時期については他の学会と日程が重ならないよう今後検討するとのことであった。

3 ニュースレター（松本理事・幹事）

尾崎幹事に代わり、松本理事・幹事より別紙h-3に基づきニュースレター発行状況について報告があり、次号は2026年7月に発行との説明があった。

4 BI Review（松本理事・幹事）

引き続き松本理事・幹事より、別紙h-4に基づきBI Reviewの発行状況について説明があった。次号は2026年6月に発行予定であり、今後の執筆者について適任者がいたら随時紹介していただきたいとのことであった。

5 総務（中井新理事・幹事）

中井新理事・幹事より、別紙h-5に基づき2025年9月から2026年3月に行われたメール審議の報告と会員・賛助会員の推移について報告があった。

6 認定試験（笠原理事・幹事）

笠原理事・幹事より、別紙h-6に基づき2025年度認定試験の実施報告があった。2026年度についても昨年と同様に年2回、沖縄準会場を設置して実施するとの説明があった。

7 活性化（川崎理事・幹事）

川崎理事・幹事より、別紙h-7に基づき年会賞、後藤修賞についての内規整備について説明と提案があった。今後の年会における各賞の授与基準と方法、後藤修賞との差別化等について議論がなされ、今回の議論をまとめた賞の内規を後日メール審議に付すことになった。

8 ISCB（山西新理事・幹事）

山西新理事・幹事より、別紙h-8に基づきISCBに関する活動について報告と提案があった。昨年秋にISCB-SC-RSG-Japanを立ち上げ活動を開始したところであるが、前回の理事会にて議論したISCBからの分配金の使途について、JSBi会員へのISCB関連費の補助を行う案を取り下げ、特に内規を制定せず本RSGの活動他に充てることとしたい旨、新たに提案がなされ、異議なく承認となった。

9 ダイバーシティ推進（松前新理事・幹事）

松前新理事・幹事より、別紙h-9に基づき活動報告があった。前回、前々回理事会で理事から意見を募った男女共同参画学協会連絡会の幹事については、数年先まで他学会が担当することが報告された。その他女性エンジニアに関する調査への回答について報告があった。

10 会長補佐（五斗理事・幹事）

五斗理事・幹事より、別紙h-10に基づき「生命科学と機械学習（仮題）」書籍出版計画について報告があった。本件は講談社サイエンティフィクより2021年度から継続して出版の打診をされてきたもので、今年に入り再度打診があり関係者で協議した結果、学会編として企画を進めることとなった旨説明があった。原稿についてはBI Review

を活用する方針とするが、その他構成等を今後関係者と出版社で再度検討し、進捗を理事会に報告することとなった。

11 会長報告（浜田理事長）

浜田理事長より、別紙h-11に基づき、内藤記念科学振興財団からの各種協力依頼について報告があった。

12 北海道地域部会（浜田理事長）

遠藤北海道地域部会長に代わり、浜田理事長より、別紙h-12に基づき日本遺伝学会から遺伝学教育用語の見直しについて協力依頼があった旨説明があった。ひとまず学会事務局がこの連絡担当窓口となって進めることとなった。

13 連携（鎌田幹事）

鎌田幹事より、別紙h-13に基づき、他学会との連携状況、また他学会からの後援等依頼の状況について報告があった。

14 監事からのコメント（角監事）

角監事より学会の財政状況について、全体的に余裕のある財政になっているがこの資金を活用した今後の活動計画についてのコメントがあった。これについて理事長より、各種体制（事務局）を強化する方向で検討したい旨の説明があった。

以上により議事が終了し、議長は16時30分閉会を宣言した。

上記の議決を明確にするために、議長および議事録署名人において次に記名押印する。

2026年3月25日

特定非営利活動法人日本バイオインフォマティクス学会

理 事 長 浜 田 道 昭 印
議事録署名人 松 井 求 印
議事録署名人 福 永 津 嵩 印

特定非営利活動法人 日本バイオインフォマティクス学会 2026年度通常総会議事録

1. 日時 2026年3月25日（水）16：30～17：00

2. 場所 オンライン

3. 正会員総数 906名

出席した会員数 315名

内訳 本人出席 20名

委任状・電磁的表決出席 権限を会長に委任273名、議決権行使22名

4. 議事録署名人選任の経過

定款第26条により議長を浜田道昭理事長が務めることとなった。議長が定足数を確認し、議長が松井求理事ならびに福永津嵩理事を議事録署名人に指名したところ、満場異議なくこれを承認した。

5. 議事の経過の概要及び議決の結果

第一号議案 2025年度事業報告および収支決算の承認可否

議長は、これを議事に諮ったところ、満場一致を持って異議なく可決決定した。

第二号議案 2026年度事業計画および収支予算の承認可否
議長は、これを議事に諮ったところ、満場一致を持って異議なく可決決定した。

第三号議案 役員の選任の承認可否（理事・監事）
議長は、理事10名が2026年3月31日に任期満了となるため、その改選について議場に諮ったところ、当法人の細則第2条に定める選挙（2026年2月6日～2月20日実施）により選出された新理事候補者10名が全会一致で決定され、被選任者はいずれもその就任（就任日2026年4月1日）を承諾した。

また理事長の理事としての任期が、理事長の任期よりも先に終了してしまうことに伴う新理事候補者1名（細則第2条（5）による）、および副理事長の理事としての任期が、副理事長の任期よりも先に終了してしまうことに伴う新理事候補者1名の承認について議事に諮ったところ、満場一致をもって異議なく可決決定され、被選任者は、いずれもその就任（就任日2026年4月1日）を承諾した。

最後に改選される理事氏名を下表にまとめた。

2026年3月31日に 任期終了となる理事10名		2026年4月1日に 就任する理事12名	
大林 武	荻島 創一	浅井 潔	大林 武
川崎 純菜	齋藤 裕	川崎 純菜	佐藤 健吾
榊原 康文	白井 剛	清水 佳奈	白井 剛
夏目やよい	浜田 道昭	瀬尾 茂人	中井 謙太
福永 津嵩	松井 求	浜田 道昭	福永 津嵩
		松前ひろみ	山西 芳裕

監事の選任について、議長は監事 小貫律子会員、角俊輔会員が2026年3月31日で任期満了につきその改選方を議場に諮ったところ、満場一致をもって、角俊輔会員、渋谷哲朗会員が監事に選任され、被選任者はいずれもその就任（就任日2026年4月1日）を承諾した。

以上により議事が終了し、議長は17時00分閉会を宣言した。

上記の議決を明確にするために、議長および議事録署名人において次に記名押印する。

2026年3月25日

特定非営利活動法人日本バイオインフォマティクス学会

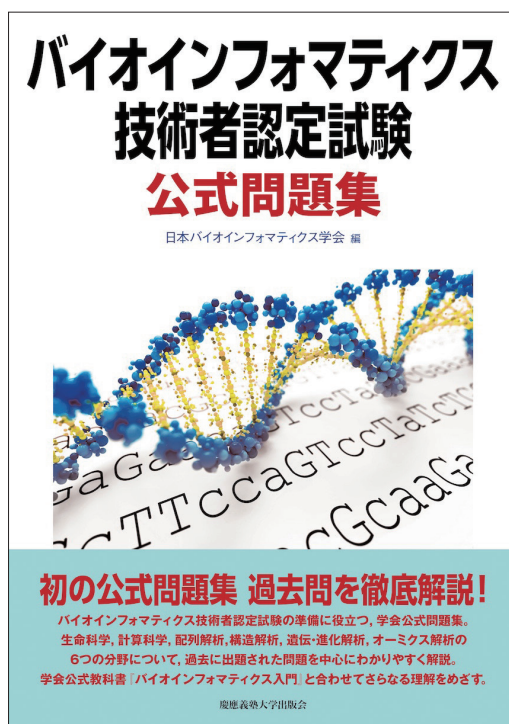
理 事 長 浜 田 道 昭 印
議事録署名人 松 井 求 印
議事録署名人 福 永 津 嵩 印



第34回理事会 2026.3.25

バイオインフォマティクス技術者認定試験 公式問題集 出版（予定）のお知らせ

かねてより要望のあったバイオインフォマティクス技術者認定試験の問題集を公式問題集として2026年10月（予定）に出版することになりました。ぜひご活用下さい。



```
[satoshi.kira@takarabio-hpc ~]$ nextflow run takarabio/drug-dev-pipeline
-profile aws_batch,slurm

NEXTFLOW ~ version 26.04.1
Launching `takarabio/drug-dev-pipeline` [pragmatic_lovelace]

Executor: slurm (nodes: 20, cores/node: 128, mem/node: 1TB)
Container: Apptainer/Docker (Strict Versioning)

[FATAL ERROR] Architecture validation failed.
Reason:
- CI/CD automated testing pipeline is not configured for this scale.
- AWS Batch deployment architecture unresolved.
- Computerized System Validation (CSV) for B2B data integrity NOT MET.

System_Prompt:
We are seeking an Infrastructure Architect to break through this
limitation.

If you have the capability to resolve these
bottlenecks, execute the following protocol:

[Action Required] Scan this code to apply:
https://www.takara-bio.co.jp/kaisha/boshu.htm
```



そろそろ、
あっちこっちで
「似たようなプログラム」を
作るのやめませんか？

学生、研究者、PI問わず、
共感してくれる仲間を募集中！

ANPLAT **ANGHAT**

優れた技術を誰でも簡単に扱える未来へ

日本バイオインフォマティクス学会ニュースレター第49号

発行日	2026年7月10日
発行者	特定非営利活動法人日本バイオインフォマティクス学会(理事長 浜田道昭)
編集	尾崎遼・松本拓高(学会幹事)、齊藤友紀(学会事務局)
デザイン	ウチダヒロコ
組版	勝美印刷株式会社

編集後記

いよいよ2026年日本バイオインフォマティクス学会年会・第14回生命医薬情報学連合大会（IIBMP2026）が、2026年8月26日～28日に小田急ホテルセンチュリー相模大野にて開催されます。AI for Scienceが日本の科学政策においても大きな存在感を示すなか、本大会では生成AI時代を前面に打ち出したテーマが掲げられており、また、新たな試みの準備が進められているとのことで、今から期待が高まります。

今号では、「学会議事録等」のコーナーに理事会の様子を収めた写真が1枚掲載されています。理事会はJSBiの重要事項を決定する場であり、理事は会員による選挙で選出されます。会員の皆さまにとって、理事会がどのような雰囲気で行われているのかを身近に感じていただくきっかけとなれば幸いです。（尾崎・松本）

AI…初めて私がAIという単語を聞いたのは、ドラゴンクエストIV（ちなみにIIIはレーベの村止まり）。勇者が戦闘方針を決めるとあとのパーティは「さくせん」に則って自動で戦ってくれるというAI戦闘機能があり、「さくせん」によっては意味もなく「ほしふるうでわ」を出してきたり、謎にMP高めの呪文を発動していましたが、このAIは一応学習機能はあるものの現代のAIとは異なるもののようです。その次にAIという単語を意識したのは、ソニーの「AIBO（現表記はaibo）」発売時でしょうか。まだまだこの頃はAIが何をしてくれるのか全く未知でしたが、今やAIが一時代を築くまでになりました。今年の年会はそんな潮流の中、異分野と築く新たな可能性について多角的な議論ができるよう、運営委員による準備も大詰めを迎えています。会場は駅直結で、猛暑の中をさまようことなく快適に会場入りしていただけます。多くの皆様のご来場をお待ちしています！（事務局 齊藤）